

青年期の人々におけるコミュニケーションツールとしての SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)利用

— SNS利用状況と青年期の対人関係のあり方との関連 —

宮 口 愛 美

問題と目的

青年期の人々は、友人関係において表面的な関わりをしている。しかし、内面ではどこか虚しさを感じ、自分の傷つきを厭わず心の底から求め合える友人関係を望んでいる(高井,2008)。木下(2012)は、安全な自己の居場所があることで、少々の傷つきを恐れず、さらに積極的に他者と関わることに繋がると述べている。今、青年期の人々にとって、安全な自己の居場所は現実だけでなく、インターネット上にもあるのではないか。

対人志向性の高い人がコミュニケーションメディアにその解消先を向けることで、メディアによって表現される自己に対する意味づけが容易に高まり、心理的・時間的な過剰な利用に結び付くとされている(小寺,2009)。インターネットは今や若者の新たなたまり場となっている。若者たちは、オンラインの社会的ネットワークの負の側面に最も影響されやすいため(Nicholasら,2010)、インターネット内でのトラブルに巻き込まれやすいのではないかと考えられる。そこで、本研究では、青年期の人々がどのようにSNSを利用し、それが青年期の対人関係観にどのような影響を及ぼしているのか、また、SNS内でのようなトラブルに遭遇し、それがSNS利用や対人関係観とどのような関連があるのかを明らかにすることを目的とする。

方法

予備調査

今回使用する多川・吉田(2002)の対人関係観尺度は50項目と項目数が多く、研究協力者の負担を考慮し、項目の精選を行うため予備調査を実施した。調査は、2012年9月から10月にインターネット利用者111名を対象に、Webアンケート調査を行った。項目においては、因子分析で抽出された8因子から因子負荷量の高い上位4から5項目を選定し、32項目を設定した。

本調査

調査協力者 青年期のSNS利用者121名

調査期間 2012年10月～12月

手続き Web上に、作成したアンケートを掲載し、始めのページに研究の目的や個人情報保護に関するインフォームドコンセントを掲載し、同意を得られた方のみ、質問項目に進んでもらう形をとった。

Webアンケートの構成 ①フェイス項目(年齢、性別、属性)、②SNSの利用に関する項目 インターネット利用に関する項目(三浦・篠原,1997;鈴木・大貫,2006;尾上,2007;岡田・野村,2010)を基に独自で作成したものを使用した。内容は、SNSの利用種類、利用動機、利用状況(利用時間、頻度、コミュニケーションの相手、ブログ等の書き込み頻度、自分の情報の公開の程度等)、トラブルの遭遇の有無や内容の20項目であった。

③**対人関係観尺度** 予備調査により作成した尺度32項目を使用し、現実とインターネット上の2つの対人関係の場合について、それぞれ回答を求めた。「非常にそう思う」「わりとそう思う」「少しそう思う」「そう思わない」の4段階で評定を用いて行った。

結果

1) SNS利用状況と属性との関連

SNSの利用状況としては、友人や知人との関係を深める為や暇つぶしの為に主にFacebookやmixiを利用し、1日平均30分未満または30分～1時間といった短時間で、何度も利用する人が多かった。また、半数の人が夜20時頃から利用し、携帯電話からの利用が多かった。SNS内で主にコミュニケーションを取る相手は友人や知人で同世代の人が多く、性別はどちらかというと同性が多い、性別を気にしないという人が多かった。SNS利用におけるトラブルに関しては、13名がトラブルに遭ったことがあり、自分の日記やブログに書いた内容がきっかけでというものが多かった。

SNS利用状況と性別との関連としては、コミュニケーション相手の性別($\chi^2(4)=18.45, p<.01$)、年齢($\chi^2(4)=10.13, p<.05$)と有意な関連があり、男性は「どちらかというと異性」、女性は「どちらかというと同様」が有意に高かった。また、男性と「自分より年下が多い」が有意に高く、女性と「自分より年下が多い」が有意に低かった。公開情報においても有意な関連があり($\chi^2(1)=7.77, p<.01$)、男性と「趣味特技」の公開、女性と「趣味特技」の非公開が有意に高かった。「パソコンからの日記の書き込み」は、男性の方が女性よりも有意に高く($t(119)=2.11, p<.05$)、日記等の公開範囲の限定は、女性の方が男性よりも有意に高かった($t(42.53)=-2.40, p<.05$)。また、属性との関連としては、利用種類と有意な関連が見られ($\chi^2(1)=7.07, p<.01$)、社会人とmixiの利用あり、学生とmixiの利用なしが有意に高かった。利用機器においても有意な関連が見られ($\chi^2(4)=10.07, p<.01$)、学生と「パソコンのみ」の利用が有意に高く、社会人と「パソコンのみ」の利用が有意に低かった。また、公開情報と有意な関連が見られ($\chi^2(1)=6.08, p<.05$)、社会人と「血液型」の公開、学生と「血液型」の非公開が有意に高かった。日記の公開範囲の限定は、社会人の方が学生よりも有意に高かった($t(83.3)=-2.20, p<.05$)。

2) 属性、SNS利用と対人関係観との関連

対人関係観においては、「real主張を曲げないつきあい」は、男性の方が女性よりも有意に高く($t(119)=2.50, p<.05$)、「real消極的なつきあい」は、女性の方が男性よりも有意に高く($t(119)=-2.02, p<.05$)、「sns積極的なつきあい」は、男性の方が女性よりも有意に高かった($t(119)=2.34, p<.05$)。性別における対人関係観に有意差が見られたため、性別における対人関係観において、SNS利用状況による影響があるのかを検討するために、2要因の分散分析を行った。その結果、性別と利用動機で有意な交互作用が示され($F(1,117)=4.53, p<.05$)、「sns積極的なつきあい」は、「友人や知人との関係を深める」動機がある男性は動機のない男性よりも有意に高かったが、女性においては動機の有無による有意差は見られなかった。また、性別と利用時間帯が定期か否かで有意な交互作用が示され($F(1,117)=5.44, p<.05$)、「sns積極的なつきあい」は、利用時間帯が定期の男性の方が、不定期の男性よりも有意に高かったが、女性においては利用時間

帯が不定期か否かによる有意差は見られなかった。性別と公開情報で有意な交互作用が示され($F(1,117)=4.97, p<.05$)、「sns誠実なつきあい」は、出身地を公開している男性の方が非公開の男性よりも有意に高かったが、女性においては公開の有無による有意差は見られなかった。

3) 属性、利用状況とSNSトラブルとの関連

属性においても、対人関係観においてもSNSトラブルとの有意な関連は見られなかった。SNSの利用状況では、SNSの利用時間の長さとの有意な関連が見られ($\chi^2(2)=7.82, p<.05$)、1時間以上の人とトラブルあり、30分未満の人とトラブルなしが有意に高かった。また、利用時間帯においても有意な関連が見られ($\chi^2(1)=8.42, p<.01$)、深夜(0時～4時)の利用者とトラブルあり、深夜(0時～4時)の非利用者とトラブルなしが有意に高かった。また、コミュニケーション相手との有意な関連が見られ($\chi^2(3)=12.13, p<.01$)、「友人・知人が多い」利用者とトラブルなしが有意に高く、トラブルありが有意に低かった。パソコンからの日記等の書き込みと有意な関連が見られ($\chi^2(1)=5.77, p<.05$)、書き込み多数群とトラブルあり、書き込み少数群とトラブルなしが有意に高かった。相手の日記等へのコメントとの有意な関連が見られ($\chi^2(1)=3.93, p<.05$)、コメント少数群とトラブルあり、コメント多数群とトラブルなしが有意に高かった。

考察

SNS利用や対人関係観においては、男女で違いが見られ、SNS利用に関しては、男性は自分の情報の公開や異性とのコミュニケーション等、積極的なつきあいをし、女性は同性とのコミュニケーションや日記の公開範囲の限定等、慎重なつきあいをしていると考えられた。また、男性はSNSの利用の仕方による対人関係観の違いが見られ、女性は見られないという結果から、男性はSNS利用により対人関係のつきあい方が変化するが、女性はSNS利用により対人関係のつきあい方が変化するわけではないと考えられた。男性においては、SNS利用が対人関係を築くためのツールとして存在していると考えられる。

SNSトラブルに関しては、いくつかのSNSの利用の仕方によって違いが見られるという結果が得られ、トラブルは、長時間の利用や深夜の利用等のインターネットの持つ負の部分に結びつくと考えられた。